

地方発小冊子 東北でも増加中

故郷の魅力 届けます



会津地方の仕事をなどを発信する小冊子「oraho」

「oraho」のような小冊子は「リトルプレス」と呼ばれ、東北でも増えている。カフェやインターネットでの販売が中心だが、地域を超えて読者を獲得している。

盛岡の魅力を伝える「てくり」(2005年創刊)は年2回、約300部を発行している。全国約50店で販売され、読者の半数は岩手県外の

地域超え読者獲得

人という。発行元は女性4人の「まちの編集室」。代表の水野ひろ子さん(46)は「広告に頼らない分、気兼ねなく伝えたいことを伝えられる」と語る。リトルプレスの作り手は主に女性。デザインや写真の使い方が凝っている。作りがおしゃれで、地元に限らず内容、友達に語り掛けているよう

書店に専門売り場

な感覚も魅力」とジュンク堂書店仙台ロフト店(仙台市)の佐藤純子さん(31)は評価する。同店はリトルプレスのコーナーを開設。「oraho」や「てくり」、仙台市の女性3人が作る「ふきながし」といった東北の冊子を中心に常時約20種類を扱う。若い女性に人気で、すぐに売切れるケースもあるとい

会津出身の山本さん「oraho」創刊



山本晶子さん

「東京で会津と言えば、白虎隊や喜多方ラーメンのイメージばかり。ほかにもいいものがあるのに、会津人がシャイな

赤べこが表紙を飾る創刊号はA5判、32頁。織元などを訪ねた会津木綿の特集に始まり、伝統的な曲がり屋を利用したゲストハウス、地酒やみその作り手らを紹介したという。

福島県会津坂下町出身の編集者山本晶子さん(36)が「会津のいいもの」をテーマにした小冊子「oraho(おらほ)」を創刊した。自費出版で、大手の取次店を介さずに販売する方式で、故郷・会津地方の魅力を届けている。

取次店介さず販売 「文化継承の助けに」

のかうまく情報が発信できていない。歯がゆかった」と山本さん。地方発の小冊子が増えている状況に後押しされ、4月末に発刊にこぎ着けた。育児休暇中に何度か帰省した際に取材を重ね、売り場の確保も自分で交渉。取扱店は会津地方のほか、仙台市内や東京の書店、カフェなど20カ所余りに広がった。今後、も休暇などを利用して年2回程度発行する考えだ。山本さんは「会津に根付く文化を知ってもらい、継承に少しでも役立てばうれしい」と話している。



東北を中心に個性的なリトルプレスがそろったコーナー。問い合わせも多いという=仙台市青葉区のジュンク堂書店仙台ロフト店